

女の「身体的自己決定」をめぐる葛藤

萩野 美穂

1980年代後半、2人の子をもつシングルマザーで駆けだしの女性史研究者だった私が女の身体や性の歴史を自分の研究テーマに選んだきっかけは、*Our Bodies, Ourselves* という本の翻訳出版を目指す女たちのプロジェクトに参加したことだった。第2波フェミニズムの中で「私のからだは私のもの」と声を上げたアメリカの女たちは、自分たちの経験と知識をもち寄り「女のからだの百科全書」と呼ばれる本を生み出した。邦訳の『からだ・私たち自身』（松香堂、1988）は、現在ウィメンズ アクション ネットワーク（WAN）のアーカイブ*に収録されていて、誰でも読むことができる。

それ以来、避妊や中絶、家族計画などの歴史を研究する中で、女自身が子どもを産むか産まないかを選べ、安全な生殖コントロールの手段にアクセスできることは、女の解放と自立にとって根本的的重要性をもつと痛感するようになり、その思いは今も変わらない。女の性と身体を管理下に置こうとする宗教や国家は今も世界中に存在し、2022年のアメリカ連邦最高裁の中絶選択権否定判決のように、女の身体的自己決定権を制限しようとする勢力と女たちとの闘いは依然として続いているからだ。

一方で、近年の生殖技術の発展がもたらした現象を前に「身体的自己決定」の意味するものの複雑化に戸惑うことも多くなった。たとえば本人の意思であれば、報酬と引き替えに卵子を提供したり、代理出産を依頼したり引き受けたりすることは、身体的自己決定権の行使と考えて良いのか。生殖をめぐる生物学的制約から女が解放され、多様な選択肢が可能となったと理解するのか。それとも「自己決定」の名を借りた女の身体の資源化や搾取と見るべきなのか。どの女性の立場に立つかにより解釈は異なってくるだろうが、私は釈然としない苦い思いを拭いきれないでいる。

* <https://wan.or.jp/dwan/dantai/detail/113?title=147#tab&gsc.tab=0>



PROFILE

おぎのみほ：性と生殖の歴史研究者。大阪大学・同志社大学などで教員を務める。著書に『生殖の政治学 フェミニズムとバース・コントロール』（山川出版社、1994）、『中絶論争とアメリカ社会 身体をめぐる戦争』（岩波書店、2001）、『ジェンダー化される身体』（勁草書房、2002）、『「家族計画」への道 近代日本の生殖をめぐる政治』（岩波書店、2008）、『女のからだ フェミニズム以後』（岩波新書、2014）など。